

日蓮大聖人御書全集

しじょうきんごどののにようぼうごへんじ

四糸金吾殿女房御返事

新版
1541
ゝ
1543

しじようきんごどののにようぼうごへんじ

四糸金吾殿女房御返事

ぶんえい

ねん

がつ

にち

さい

にちげんによ

文永12年('75) 1月27日

54歳

日眼女

せん

にほんこく

いつさいしゆじよう

め

たましい

詮ずるところ、日本国の一切衆生の目をぬき神をまど

じゃほう

しんごんし

過

お

わかす邪法、真言師にはすぎず。これはしばらくこれを置く。

じゆうゆ

いつさいきよう

ほけきよう

しやうれつ

と

たも

み

十喩は一切経と法華経との勝劣を説かせ給うと見え

ほとけ

みこころ

そうら

いつさいきよう

ぎようじゃ

たれども、仏の御心はさには候わず。一切経の行者と

ほけきよう

ぎようじゃ

並

ほけきよう

ぎようじゃ

にちがつとう

法華経の行者とをならべて、法華経の行者は日月等のご

しよきよう

ぎようじゃ

しゆしやう

とうこ

もう

せん

とし、諸経の行者は衆星・灯炬のごとしと申すことを詮

おぼ

そうらう

知

と思しめされて候。なにをもつてこれをしるとならば、

だいはち たと しも いち さいだいじ もん

第八の譬えの下に一の最大事の文あり。いわゆる、この

きようもん い うのうじゆじぜきようてんしや やくぶによぜ おいつさいしゆじよう

經文に云わく「有能受持是經典者、亦復如是、於一切衆生

ちゆう やくいだいいち よ きようてん じゆじ もの

中、亦為第一（能くこの經典を受持することあらん者も

いつさいしゆじよう なか だいいち

またかくのごとく、一切衆生の中において、またこれ第一

とうんぬん にじゆうにじ いっきようだいいち かんじん いっさい

なり」等云々。この二十二字は、一經第一の肝心なり、一切

しゆじよう め もん こころ ほけきよう ぎようじや にちがつ だいぼんのう

衆生の目なり。文の心は、法華經の行者は日月・大梵王・

ほとけ だいにちきよう ぎようじや しゆじよう こうが ぼんぷ

仏のごとし、大日經の行者は衆星・江河・凡夫のごと

説 そうろうきようもん

しととかれて 候 經文なり。

よ なか なんによそうに きら ほけきよう

されば、この世の中の男女僧尼は嫌うべからず、法華經を

たも たも ひと いっさいしゅじよう 主 ほとけ ご 覧

持たせ給う人は、一切衆生のしゅうとこそ仏は御らん

そうろう ぼんのう たいしやく 仰 たも もう

候らめ、梵王・帝釈はあおがせ給うらめと、うれしさ申

すばかりなし。

きようもん ちゆうや あん ちようせき 読 そうら つね

また、この經文を昼夜に案じ、朝夕によみ候えば、常

ほけきよう ぎようじや そうら ぜきようてんしや

の法華經の行者にては候わぬにはんべり。「是經典者」と

しや もんじ 訓 そうら よ なか

て、「者」の文字は「ひと」とよみ候えば、この世の中の

びく びくに 優婆そく 優婆夷 なか ほけきようしん

比丘・比丘尼・うば塞・うばいの中に法華經信じまいらせ

そうろうひとびと 見 そうら つぎしも

候人々かとみまいらせ候えば、さにては候わず。次下の

きようもん しや もんじ ほとけ 重 説 たま そうろう

經文にこの「者」の文字を仏かさねてとかせ給いて候に

にやくうによにん

によにんあ

説

そうろう

は、「若有女人（もし女人有つて）」ととかれて候。

にちれん

ほけきよう

ほか

いつさいきよう

見そうろう

によにん

日蓮、法華経より外の一切経をみ候には、女人とはな

そうら

きよう

によにん

じごく

つか

さだ

りたくも候わず。ある経には女人をば地獄の使いと定め

きよう

だいじゃ

説

きよう

曲

ぎ

られ、ある経には大蛇ととかれ、ある経にはまがれ木の

きよう

ほとけ

たね

焦

もの

説

そうら

ごとし、ある経には仏の種をいれる者とこそとかれて候

ぶつぽう

げてん

えいけいき

もう

もの

さんらく

え。仏法ならず外典にも、栄啓期と申せし者、三楽をうた

なか

むじよらく

もう

てんち

なか

によにん

う

いし中に、無女楽と申して、天地の中に女人と生まれざる

らく

立

そうら

禍

さんによ

起

ことを樂とこそたてられて候え。わざわい三女よりおこれ

さだ

そうろう

ほけきよう

きよう

たも

りと定められて候に、この法華経ばかりに、この経を持つ

によにん いっさい によにん

過

いっさい なんし 超

女人は一切の女人にすぎたるのみならず、一切の男子にこえ

そうろう

たりとみえて候。

詮

いっさい

ひと

謗

そうろう

せんずるところは、一切の人にそしられて候よりも、

によにん

おん

愛

思

おとこ

不便

女人の御ためには、いとおしとおもわしき男にふびんと

思

過

いっさい

ひと

憎

おもわれたらんにはすぎじ。一切の人はにくまばにくめ、

しゃかぶつ

たほうぶつ

じつぽう

しよぶつ

ないしほんのう

たいしやく

にちがつとう

釈迦仏・多宝仏・十方の諸仏、乃至梵王・帝釈・日月等に

不

便

思

苦

ほけきよう

だにもふびんとおもわれまいらせなば、なにくるし。法華經

褒

にだにもほめられたてまつりなば、なにかくるしかるべき。

いま

さんじゆうさん

おん

厄

おん布施

送

給

そうら

今、三十三の御やくとて、御ふせおくりたびて候えば、

しやかぶつ ほけきよう につてん み 前 もう 上 そうら ひと み
釈迦仏・法華経・日天の御まえに申しあげ候いぬ。人の身

そう かた 肩 に かみ いち
には左右の肩あり。このかたに二の神おわします。一をば

どうみようじん に どうしようじん もう に かみ ぼんてん
同名神、二をば同生神と申す。この二の神は、梵天・

たいしやく にちがつ ひと 守 はは はら うち い
帝釈・日月の人をまぼらせんがために、母の腹の内に入り

いっしょう
しよりこのかた、一生おわるまで、影のごとく眼のごと

付 したが そうろう ひと あく ぜん
くつき随って候が、人の悪をつくり善をなしなんどし

そうろう 露 塵 残 てん 訴
候をば、つゆ・ちりばかりものこさず天にうつたえまい

そうろう けごんきよう もん そうろう し かん だい ちち てん だい
らせ候なるぞ。華嚴経の文にて候を止観の第八に天台

だいし 読 たま
大師よませ給えり。

ただし、しんじん信心のよわきものをば、ほけきよう法華經を持つ女人なれ

捨

そうろう

例

たいしようぐんこころ

弱

ども、すつるとみえて候。れいせば、大將軍心ゆわけれ

甲斐

弓

弱

弦

緩

ば、したがうものもかいなし。ゆみゆわければつるゆるし、

かぜ

緩

波小

自

然

道

理

風ゆるなればなみちいさきは、じねんのどうりなり。しかる

左衛門殿

ぞく

にほん

肩

並

に、さえもんどのは、俗のなかには、日本にかたをならぶべ

者

ほけきよう

しんじや

相

連

たま

きものもなき法華經の信者なり。これにあいつれさせ給いぬ

にほんだいいち

によにん

ほけきよう

おん

りゆうによ

るは、日本第一の女人なり。法華經の御ためには竜女とこ

ほとけ

思

そうろう

おんな

もう

もんじ

そ仏はおぼしめされ候らめ。女と申す文字をば「かか

訓

そうろう

ふじ

まつ

懸

め

おとこ

いま

る」とよみ候。藤の松にかかり、女の男にかかるも、今

さえもんどの し

たま

ほけきよう

導

は左衛門殿を師とせさせ給いて、法華經へみちびかれさせ

たま そちら

給い候え。

さんじゅうさん

厄

てん

さんじゅうさん

幸

また三十三のやくは、転じて三十三のさいわいとならせ

たも

しちなん

すなわ

めつ

しちふく

すなわ

しやう

給うべし。「七難は即ち滅し、七福は即ち生ず」とは、こ

とし

若

ふく

重

そうろう

れなり。年はわこうなり、福はかさなり候べし。あなかし

こ、あなかしこ。

しやうがつにじゅうしちにち

正月二十七日

にちれん

かおう

日蓮

花押

しじようきんごどののにようぼうごへんじ

四条金吾殿 女房御返事